

ソーシャル・グループワークの実践

—グループ回想法の介入効果—

津 田 理恵子*

Practicing Social Group Work -Intervention Effect of Group Reminiscence Therapy-

Rieko TSUDA

要 約

地域の高齢者にグループ回想法の介入を試み、グループとしての成長・発達を促す過程を通して生きがい感の向上を目指すことを目的とし、グループ回想法を実践し生きがい感スケール（K-1式）の得点を、介入前と介入後で比較検討した。その結果、参加者の生きがい感が上昇する傾向が確認でき、初回よりも最終回に、参加意欲・積極性、喜び・楽しみなどの満足度、対人コミュニケーション、回想内容の発展性などの得点が増え、自発的な発言回数が増えることが確認できた。この結果をもとに、ソーシャル・グループワークの1手法として、グループ回想法について整理した結果、ソーシャル・グループワークの1手法としてグループ回想法を捉えた場合の利点4点と、回想法展開過程におけるリーダーの役割・機能として8点を示し、ソーシャル・グループワークのプログラム活動の1技法としてグループ回想法を位置づけた。

キーワード：ソーシャル・グループワーク グループ回想法 地域の高齢者 生きがい感

はじめに

高齢化が深刻な課題となっている我が国では、認知症高齢者、閉じこもり高齢者、老々介護や自殺者が増加する傾向が続いている。そのため、高齢者のエンパワメントを高め生きる力を引き出すことは、高齢者の福祉の実現に向けて重要な意義がある。

ソーシャル・グループワークについて、大利

(2003)¹⁾ は、セツルメント運動やレクリエーション運動、教育、社会改良、および社会科学などの多岐にわたる領域を源流とし、1930年代からソーシャル・グループワークという述語が用いられ、グループワークを通してメンバー個々の成長と変化を促すことを目的としていると述べている。

回想法は、アメリカの精神科医 Butler (1963)²⁾ によって、高齢者の回想に対し共感的・受容的態

* 社会福祉学科 准教授

1) 大利一雄：グループワーク，勁草書房，8（2003）。

2) Butler, R.N.: The Life Review And Interpretation of Reminiscence in the Aged. *Psychiatry*. 26, 65-75 (1963).

度で意図的に介入することで、老年期の最終課題である人生の統合が達成できる可能性が開かれると提唱された技法である。Butler (1963) が回想法を提唱して以後、高齢者の過去への回想は積極的に行うことが望ましいという考えに転換され、回想法を活用した取り組みは広がりを見せている。

回想法には、数人のメンバーでグループを形成して行うグループ回想法と1対1で行う個別回想法があり、2008年に特別養護老人ホームで実践したグループ回想法^{3) 4) 5)}では、グループワーカーがグループの展開過程に、意識的・意図的に介入し、グループメンバーの相互交流が促されていく中で、生きがい感が向上し、主体的行動が増加することが確認できた。

そこで、今回地域の高齢者にグループ回想法の介入を試み、グループとしての成長・発達を促す過程を通し、生きがい感の向上を目指すことを目的とした。さらに、グループ回想法を、ソーシャル・グループワークの視点から考察を深め、ソーシャル・グループワークのプログラム活動の1技法として回想法を位置づけることを目的とした。

1 研究方法

1. 対象者：対象者は、AグループとBグループの2グループで合計10名。Aグループは、地域のコミュニティセンターにグループ回想法参加者募集のパンフレットを貼付し、事前申し込みがあった男性1名と女性3名で平均年齢72.3±2.7歳であった。Bグループは、回

想法の講座を受講後に回想法スクールへの参加を呼びかけ、自主的に申し込みがあった女性4名と男性2名で、平均年齢±標準偏差は70.8±8.1歳であった。

2. 介入期間：Aグループは、平成21年11月27日～12月18日の期間で4日間。Bグループが、平成22年6月4日～6月25日の期間で4日間。それぞれ、週に1回60分間の回想法スクールを合計4回実施した。
3. セッション：クローズド・グループで実施し、各回テーマに合わせた刺激材料として、テーマに合わせた懐かしい品物に自由に触れてもらいながらセッションを行った。各回のテーマと刺激材料について表1に整理した。セッション中の約束として、スクール開始前に、守秘義務と無理に話さなくてもいいことなどについてリーダーから説明した。
4. セッティング：場所は、A大学研究室を使用し扉を閉めて行った。スタッフとして、リーダー1名(筆者)、コリーダー2名、逐語録1名、発言回数記録者1名、ビデオカメラとカメラ撮影1名を配置した。
5. 評価尺度：グループ回想法初日(開始前)と最終日(終了後)に、対象者への直接質問による評価として、信頼性・妥当性が確認されている、近藤(2007)⁶⁾が開発した生きがい感スケール(K-I式)を用いた。16項目の質問に対して、はい(2点)、どちらでもない(1点)、いいえ(0点)の3件法を用いて配点

3) 津田理恵子：高齢者福祉施設における回想法の実践－対象群を設けた介入効果と生きがい－, 神戸女子大学健康福祉学部紀要, 1, 43-56 (2009).

4) 津田理恵子：特別養護老人ホームにおける回想法の実践－クローズド・グループによる介入効果－, 日本看護福祉学会誌, 14 (2), 109-123 (2009).

5) 津田理恵子：グループ回想法の介入効果 - 特別養護老人ホーム入所者の生きがい感 -, 厚生学の指標, 56 (10), 34-40 (2009).

6) 近藤勉：生きがいを測る, ナカニシ出版, 156 (2007).

表1 各回のテーマと刺激材料

	A グループ				
	テーマ	刺激材料(物)	刺激材料(味)	動作	参加者持参品
1回目	ふるさとの思い出 自己紹介	昔の映像	駄菓子		
2回目	子供の頃の遊びの 思い出	昔の玩具(ビー玉・百人一首・ ヨーヨー・けん玉・おはじき・ 竹馬・コリンコゲームなど) 童謡のCD	たいやき	コリントゲーム べったん けん玉 竹馬	
3回目	小学唱歌 小学校の思い出	尋常小学校の本・お金・そろ ばん・ラジオ体操CD・洗濯 板	たこやき	こままわし おはじき 合唱	木製こま 歌の本
4回目	懐かしい味の 思い出	古銭	しがらき餅・とこ ろてん・ボンがし・甘 酒		お手玉 蛙かえし
思い出のアルバム作り 修了証		昭和初期のCD			
	B グループ				
	テーマ	刺激材料(物)	刺激材料(味)	動作	参加者持参品
1回目	ふるさとの思い出 自己紹介	コリントゲーム・本(神戸の 街並み・昭和の東映映画ポス ター集・昭和の電車)	たい焼き・あたりま えだのクラッカー	コリントゲーム	
2回目	子供の頃の遊びの 思い出	ロバのパンの模型・石盤・ろ うせき・昭和44年の新聞・日 光写真・玩具(べったん・お はじきなど)・百人一首・昔の 遊びのDVD	たこ焼き・金平糖	ぼうずめくり べったん	
3回目	輝いていた時代の 思い出	修身の教科書・写真・蓄音器	かき氷・はったい 粉・ニッキ水	はったい粉作り かき氷作り	回想録 写真 パンフレット
4回目	懐かしい味の 思い出	古銭・古書(教育勅語・のら くろ)	酒かす・蒸しパン・ ほうば餅(米粉の餅 菓子)・薩摩芋の蒸し 菓子	酒かす焼き 蒸しパン作り	焼きたてパン 回想録
思い出のアルバム作成 修了証		ジュークボックス 昭和初期の音楽		アルバム作成	

し、合計得点(最大32点)を生きがい感得点
とて算出した。質問の中に4項目の逆転項目
が含まれていた。さらに、ベンダー観察記録
表を用いた評価を行った。ベンダー観察記録
表(個人継続記録表)は、Bender, M.P. (1987)
によって開発され、野村(1998)⁷⁾によって
一部改変されたベンダー観察記録表を使用し
た。ベンダー観察記録表は、毎回の回想法ス
クール実施直後に、リーダー・コリーダー・

記録者などのスタッフ全員が集まり回想法ス
クールを振り返り、「参加意欲・積極性」・「回
想内容の発展性」・「回想、発言内容の質」・
「対人コミュニケーション」・「喜び、楽しみな
どの満足度」の5項目について、4点から1
点までの配点で評価した。また、発言が自発
的か促しによるものかを記録した。自発的な
発言は、個人を特定して質問を受けて発言し
たのではなく、促しによる発言とは、個人を

7) 野村豊子: 回想法とライフレビュー, 中央法規, 120-121 (1998).

特定して質問した問いかけに対する発言とした。

- 倫理的配慮：研究目的・方法・予想される損害と効果，個人情報流出する恐れがないことなどについて，個人情報保護法，臨床研究に関する倫理指針（厚生労働省）を遵守し，知り得た個人情報を許可なく発表，公開，漏洩，利用しない旨について口頭により説明し同意書による承諾を得た。
- 分析方法：SPSS15.0を使用し，生きがい感スケール（K-1式）の介入前と介入後の得点についてt検定を用い比較検討した。ベンダー観察記録表の初回と最終回の参加者全員の平均得点を項目ごとにt検定を用いて比較検討した。

II 結果

1. 生きがい感スケール（K-1式）

生きがい感スケール（K-1式）の結果（表2）は，グループ回想法介入前と比較すると介入後に，10名中9名の生きがい感得点は上昇していた。参加者全員の平均得点±標準偏差では，介

入前が 24.6 ± 5.6 点で，介入後が 26 ± 5.1 点と上昇していたが，有意な差は認められなかった（ $P=0.53$ ）。

2. ベンダー観察記録表

ベンダー観察記録表の回想法スクールの初回と最終回の参加者全員の平均得点を比較（図1）すると，「参加意欲・積極性」・「喜び，楽しみなどの満足度」・「対人コミュニケーション」の3項目において，有意な得点の上昇（ $P=0.01$ ）が確認でき，「回想内容の発展性」でも，有意な得点の上昇（ $P=0.05$ ）が確認できた。

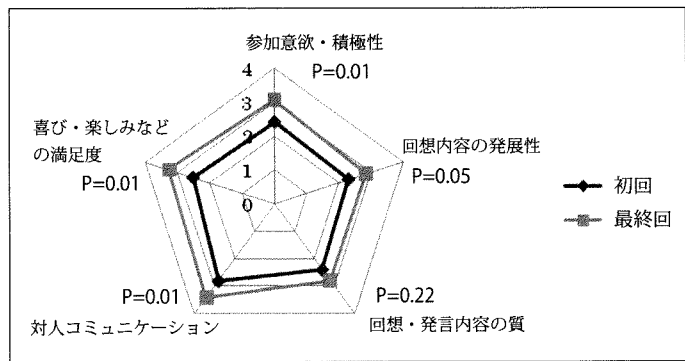


図1 ベンダー観察記録表：初回と最終回の全員の平均得点の比較

表2 生きがい感スケールの得点（点）

n = 10

	介入前			介入後			P 値
	生きがい感得点(点)	判定の解釈	平均値±標準偏差(点)	生きがい感得点(点)	判定の解釈	平均値±標準偏差(点)	
A	24	高いほう	24.6 ± 5.6	28	大変高い	26 ± 5.1	0.53
B	25	高いほう		30	大変高い		
C	21	ふつう		22	ふつう		
D	23	ふつう		29	高いほう		
E	23	高いほう		31	大変高い		
F	28	大変高い		29	大変高い		
G	30	大変高い		31	大変高い		
H	29	大変高い		30	大変高い		
I	12	大変低い		17	ふつう		
J	31	大変高い		26	高いほう		

3. 発言回数

参加者個別の初回と最終回のスクール開催中（60分間）の発言回数を自発的な発言と促しによる発言にわけて表3に整理した。促しによる発言は、初回より最終回に減っており、自発的な発言回数は、初回より最終回に増えていた。

Ⅲ 考察

グループ回想法を実施した結果、テーマに沿って参加者個々が懐かしい思い出を語る過程を通し、1人のメンバーが発言した内容から、他のメンバーが忘れていた記憶を想起し、メンバー間の相互交流が自然に促され、介入効果として参加者の生きがい感が上昇する傾向が確認できた。さらに、初回よりも最終回に、参加意欲・積極性、喜び・楽しみなどの満足度、対人コミュニケーション、回想内容の発展性などの得点が増え、自発的な発言回数が増えることが確認できた。この結果をもとに、ソーシャル・グループワークの1手法としてグループ回想法について整理していく。

1. ソーシャル・グループワークとしての回想法

武田（1982）⁸⁾は、グループに属することで心理社会的な満足を与えてくれると述べている。保田井（1999）⁹⁾は、集団とは人々の集まりで、個

人は集団に所属することによって、物質的また心理的ニーズを充足し、癒し・安らぎの場を提供すると述べている。

このことから、回想法をクローズド・グループで実施したことは、地域社会における新たな集団形成につながり、参加者にとっては、集団に属する癒しや安らぎから心理的ニーズが充足され、その結果として、生きがい感が向上したと捉えることができる。

グループワークの定義について、武田・大利（1991）¹⁰⁾は、グループに参加しているクライアントが望ましい変化をなすよう援助するひとつの様式で、意図的なプログラム活動の展開によって仲間関係を成長させ、グループ内の相互作用を深めるとしている。

このことから、今回、意図的なプログラム活動として回想法スクールを開催したことは、参加者の相互交流が深まる中で、新たな仲間関係を助長することにつながったといえ、グループ回想法の実践は、ソーシャル・グループワークの1技法として捉えることが可能といえる。

2. 展開過程

グループ・プロセスについて、武田（1882）¹¹⁾は、集団の感情をメンバーの1人ひとりが担い、

表3 参加者個別の自発的発言と促しによる発言回数

		A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	合計
促しによる発言回数（回）	初回	11	8	3	5	6	6	2	2	8	3	54
	最終回	2	0	1	1	5	7	3	3	5	8	35
自発的な発言回数（回）	初回	11	5	23	34	14	13	9	16	10	22	157
	最終回	20	27	6	22	17	17	23	21	24	23	200

8) 武田建：グループワークとカウンセリング，YNCA 出版，279（1882）。

9) 保田井進・硯川眞句・黒木保博編・保田井進著：福祉グループワークの理論と実際，ミネルヴァ書房，3-4（1999）。

10) 武田建・大利一雄：新しいグループワーク，日本YMCA 同盟出版部，192（1991）。

11) 前掲8），260。

また逆に集団の感情といった全体の雰囲気が個々のメンバーに影響を与え、1人ひとりから違った行動や発言を引き出すといった現象が起こってくる。グループ感情とメンバー間の直接的な関係は、いつも同じ状態ではなく、時の流れや場面の変化とともに、グループ自体も変わっていくと述べている。

グループ回想法の展開過程を振り返ると、初回につまらなそうな表情で俯いて過ごす時間が長かったが参加者が、他参加者からの直接的な質問をきっかけとし、会話が弾み和やかな雰囲気に変化する様子が見られた。また、「昔のことは覚えていない」と開始当初に話していた参加者が、他者が語る思い出を聞くことで、「どんどん思い出してきた」と多くの思い出を懐かしそうにジェスチャーをまじえ語る姿が見られた。

このように、グループ回想法の展開過程においても、参加者の言動や行動が全体の雰囲気や個々の参加者の感情に働きかけていた場面が多くあった。グループで実践する中では、全体の雰囲気が参加者個々に大きな影響を与えながら、グループ間の人間関係が形成されていったといえる。このことは、回想法を個別回想法ではなく、グループ回想法で実践した効果として捉えることができる。

グループ体験について、野村(2004)¹²⁾は、メンバーにとって価値あるグループ体験が彼らの成長や発達、社会的能力の向上に決定的な意味を持つと述べ、大利(2003)¹³⁾は、メンバー個々の成長と変化を促すものであると述べている。

最終日の終了後に参加者全員から、グループ回想法に参加して良かったことが自主的に語られ、

今後も同じメンバーで何らかの活動をしていきたいと主体的行動につながる発言が聞かれた。このことは、グループ回想法に参加したことで、グループ間の相互交流を通し、参加者個々の成長や発達を促すことにつながったと捉えることができる。

武田(1882)¹⁴⁾は、メンバーと人間関係を築く過程で、グループワークが始まる前や終わった後で接近法を利用し、メンバーが話すことに充分の関心を払うことで、メンバーが「自分は大切なんだ」という気持ちを持つことができると述べている。

この点について、グループ回想法の展開過程においても、スクール開始前と終了後に刺激材料に触れながら、参加者とお茶を飲み、参加者の声に耳を傾けることや、参加者の希望に応じて、スクール開始前後にも昔の遊び体験を行うなどさまざまな工夫を取り入れていた。このように、スクール開催時間に限定せず、スクール開始前後の時間もプログラムの一部として捉え、参加者個別の声に耳を傾け、良好な人間関係を築いていくことは、グループワークを円滑に運営していくうえで重要な視点といえる。

また、武田(1882)¹⁵⁾は、グループワークにおけるプログラムは、活動中心ではなく人間中心でなければならないと述べている。グループ回想法展開過程においては、当初計画していたテーマを参加者の希望に合わせて修正し、グループ感情を観察する中で、話しの流れに合わせて、刺激材料を工夫しながら活用していた。このように、参加者の状況に合わせて臨機応変にプログラムに修正を加えていくことも、グループワークの効果を高め、いくうえでは重要な視点といえる。

12) 野村武夫：はじめて学ぶグループワーク，ミネルヴァ書房，154 (2004)。

13) 大利一雄：グループワーク，勁草書房，53 (2003)。

14) 前掲8)，248。

15) 前掲8)，287。

3. グループリーダー

グループリーダーについて、武田（1882）¹⁶⁾は、メンバーと親しい人間関係をつくりあげていかななくてはならないと、リーダーの①受容的態度、②個人の尊重、③感情の重視、④共感、⑤本人の選択決定といった諸原則に十分な配慮を払うべきであると述べている。大利（1995）¹⁷⁾は、メンバーの成長と変化を促すいっそう効果的な媒体となりうると示し、野村（2004）¹⁸⁾は、どのような相互作用によってどのような変化をもたらされるのか、その鍵を握っていると述べている。さらに、武田・大利（1991）¹⁹⁾は、メンバーの良い点を見つけてそれを誉めたり関心を示す（つまり強化する）ことを多くした方が、リーダーとしてメンバーに対する魅力が増えるのは当然であると述べている。

この点について、参加者が懐かしい思い出を語った場合、リーダーは常に傾聴し感謝の気持ちを述べるよう努めていた。その結果、懐かしい思い出があふれるように次々と語られる場面が多かった。このように、グループ回想法のリーダーは、懐かしい話しを表情豊かに語る参加者に、敬意を払い感謝の言葉を伝えると共に、良い点を誉めていくことを積極的に行っていく姿勢が重要と考える。

さらに、発言回数が減った参加者には、リーダーから積極的に発言を促すことを心がけていた。このことにより、話の輪に参加し常に笑顔で過ごすことができていた。このことから、リーダーは、グループ間における相互関係を把握し、人間関係を調整していく過程を通して、グループとしての成長・発達を促していくことが重要で、グループ

内のメンバー1人ひとりにとって価値ある体験へと導くことが必要といえる。

そして、武田・大利（1991）²⁰⁾は、グループの形成当時にはできるだけワーカーによる強化を増し、中期においてはグループ活動から満足を得られるように工夫し、終了期に近づくに従って、メンバーの満足の源を次第にグループ外のものへ移していくという意識的な努力が必要であると述べている。前田（1995）²¹⁾も、終結に当たってワーカーは、対象者や状況に起こった望ましい変化が、処遇の終了後も維持され続けるよう、必要な措置をとっておかなければならないと述べている。

この点については、グループ形成期には感謝の気持ちを述べることを多く心がけ、参加者の回想が促されるよう働きかけた。中期には、参加者の希望に応じてプログラム内容を臨機応変に修正し相互交流が深まるよう心がけた。そして、終了期には、主体的行動への発言を活かし、2～3ヶ月に1回同窓会を行うことを提案した。

このように、リーダーはグループの形成当時・中期・終了期を意識し、形成当時は積極的に強化し、中期には参加者同士の相互交流を深め、終了期には参加者個別に応じた支援が展開されるよう配慮していくことが重要といえる。

まとめ

グループ回想法に参加した高齢者は、グループとして成長・発達する過程において、生きがい感が上昇し、回想法スクールの回を重ねるごとに、参加意欲・積極性、喜び・楽しみなどの満足度、対

16) 前掲8), 248.

17) 福田垂穂・前田ケイ・秋山智久編：川田誉音編：大利一雄著：グループワーク教室，有斐閣，118（1995）.

18) 前掲12), 154.

19) 前掲10), 194.

20) 前掲10), 194.

21) 前掲17), 前田ケイ著，116.

人コミュニケーション、回想内容の発展性などが増し、自発的な発言回数が増えることが確認でき、ソーシャル・グループワークの1手法として、グループ回想法について考察を深めた結果、回想法をソーシャル・グループワークとして捉えた場合の利点として以下の4点を整理し、グループを活用して介入する場合の回想法展開過程におけるリーダーの役割・機能として以下の8点を整理した。

回想法をソーシャル・グループワークとして捉えた場合の利点

1. 1人の参加者が語った昔の記憶を、他者が聞くことで、昔の記憶が想起されるなど、他者の言動や行動から自己の言動や行動が促される。
2. 昔の懐かしい記憶は自信を持って人前で表情豊かに語ることができ、他者との新たな人間関係の形成を促すことができる。
3. グループ内の相互作用を通じたプログラム活動を通して、相互交流が深まる中で、グループとして望ましい変化をもたらすことができる。
4. 参加者が拒否や孤立している場合でも、参加者が共に経験する過程を通して経験を分かち合うことができ、お互いを観察する中で他者の言動や行動を受容していくことが可能になる。

グループ回想法のリーダーの役割・機能

1. 参加者個別の状況やグループとしての関係を把握し、グループとしての相互交流が図れるよう介入手法を臨機応変に変化させ、グループとしての成長・発達を促す。
2. グループワークとして1つのテーマに沿って相互交流が図れない場合、場面の転換を図る。
3. 相互作用におけるコミュニケーションの潤滑油になる刺激材料を、工夫して活用することでグループ機能を維持する。

4. 回想法のプログラム活動を通じて、参加者1人ひとりにとって価値ある体験へと導く。
5. スクール開催前後の時間もプログラムの一部と捉え、参加者の声に耳を傾ける。
6. グループ形成時は積極的に強化し、中期には参加者同士の相互交流を深め、終了期には参加者個別に応じた支援に配慮する。
7. 参加者の発言を傾聴・受容・共感し、敬意を払い感謝の言葉を伝えると共に、良い点を誉めていくことを積極的に行う。
8. 約束事について承諾を得、契約をかわす。

以上のことから、回想法の介入効果をより一層あげていくためにも、グループワークの理論と方法を取り入れ回想法をグループワークのプログラム活動の1手法として位置づけることで、回想法実践の大きな力になっていくと考える。

今回の対象者は、自主的に回想法スクールへの参加申し込みが可能な高齢者で、もともと活動的で、生きがい感も高い高齢者の集団であった。対象人数も10名と少ないことから、今後も継続して回想法スクールを運営し、その効果を検証していく必要がある。

最後に、スクール終了後に、生きがい感得点が減少していた参加者が1名いたが、スクール開催期間中に家庭内にトラブルがあったと聞いており、そのことが、生きがい感に影響を与えていたことも考えられるが、今後も継続して確認していきたい。

謝辞

本研究にご協力頂き、グループ回想法に参加して頂いた方々に心から感謝致します。

付記

本研究は、科学研究費補助金（基盤研究（C）2009年）を受けて実施した（課題番号：21530631）。